

第9章 「『白蛇伝』と蛇をめぐる民俗—中国—」

第10章 「インド・東南アジアのナーガ」

第11章 「イブをだました蛇—西アジアからヨーロッパへ—」

第12章 「畏敬と追放—ヨーロッパの蛇—」

参考文献の案内

これらの論稿の内、第1章から第8章までが小島環禮氏の論稿。そして、第9章は西脇隆夫氏、第10章は大林太良氏、第11章は矢島文夫氏、第12章は飯豊道男氏の論稿である。各章は、そのタイトルからも充分うかがえるように、それだけで非常にボリュームのある豊かな内容と質を誇っている。また、巻末の文献紹介も充実しており、蛇についてより深く探るための指針が用意されている。

『蛇の宇宙誌』においても、具体的な世界諸地域の事例を比較していく上での方法論等は残念ながら、記述されていない。しかしながら、『蛇の宇宙誌』では、人間の蛇に対する「恐怖感」「嫌悪感」そして「宗教性」が冒頭より強調されている。それが、小島氏が言うところの「人間の知性の源になっている泉」にあたるのかは、わからない。が、このように、最初から人間の蛇に対する普遍的な感情を前面に出して、世界各地の事例を紹介していくという方法は興味深い。

この『動物をめぐる民俗自然誌』シリーズは、人間の文化を動物を通して、人間の知性の源を探るものである。しかし、「比較」といった理論的、方法論的な部分について明確に言及している部分が少ない点は残念である。現在の比較民俗学においても、こうした部分が非常に弱いことは否めないのが現状である。もちろん、東アジア地域に注目し、「東アジア文化圏」とでも言うべきものを設定し、各国家社会へ組み込まれた民俗事象を歴史的構造のなかで整理し、捉え直そうとする鈴木満男の論がある。このシリーズは、こうした鈴木満男の論がある。このシリーズは、こうした鈴木満男の提唱している方法論、作業過程に対して意識はしているものの、個々の事例等を厳密に検証したうえで扱ってはいないようである。こうした点は、

少々物足りないが、全体としてよくまとまったシリーズである。

ともすれば、いい意味でも悪い意味でも、自国と東アジア地域にばかり眼を奪れがちな点が評者を含め、現在の比較民俗学には有りがちである。しかし、こうしたマクロな視点からの研究は非常に刺激的である。未だに比較民俗学の方法論については、未解決な部分が多いのが現状であるが、こうしたマクロな視点と人類の普遍的な部分への視点は忘れてはならない。

『人・他界・馬—馬をめぐる民俗自然誌—』

(248頁 1991年1月10日 東京美術刊 2000円)

『蛇の宇宙誌—蛇をめぐる民俗自然誌—』

(277頁 1991年11月15日 東京美術刊 2000円)

池上良正著

『悪霊と聖霊の舞台』

—沖繩の民衆キリスト教に見る救済世界—

西山 智香[※]

「なぜ沖繩のキリスト教なのか」

この言葉は著書の一節に設けられているものであるが、本書は伝統宗教のうずまく沖繩において、今起こりつつある一つの宗教現象が語ろうとするものは何か、今沖繩で何が起こりつつあるのかという疑問に一つの指針を示そうと試みられた、宗教的モノグラフである。

しかし、沖繩という民俗空間、そしてそこに根付く伝統宗教に通じていない評者が沖繩で繰り広げられている一教会の宗教現象を語ろうとすることは大きな冒険であり、そういった意味からも本書の沖繩のキリスト教研究における位置付けや、伝統宗教を含めた諸宗教の構図を描き得ることが困難であることを最初にお断りしておきたい。

さて、本書において大きく興味を惹かれたのは次の二点である。

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

第一点は、著者の言葉を借りていうなら、記述における「揺らぎ」の問題である。これは、沖縄での宗教研究にかかわらず、一つの宗教現象を統合的に理解しようとする上で、必ずといってよい程、向き合わざるを得ない問題であろう。それは、「対象への限りない接近と、一定の距離を置いた眼差しとの不断の緊張関係」であり、対象における調査者の位置と視点がどこに置かれ、またどれだけ対象をいきいきと描き得ることができるか、ということである。（この問題に関して著者はこの種の議論は「書く」という作業に委ねられるとしている。）

第二点は、著者が前者『津軽のカミサマ 救いの構造をたづねて』（どうぶつ社、1987）での試みに続く、「救い」という一宗教現象の構造そのものの解明である。これは、沖縄において、伝統宗教によって「救われていた」であろう人々が、「救われない」状況を認識し、新たに「救い」を求める対象を生み出していったという現状をふまえて、人々が求める「救い」が一体現在の沖縄において何であるのか、そして何が人々に新たに「救い」を求めさせる状況を引き起こしたのか、その構造を究明することである。

本書でとりあげられた沖縄キリスト福音センターは、沖縄のプロテスタント教会といった歴史的伝統と組織的安定性を持ったいわゆる主流教派ではなく、本土復帰後の沖縄社会のなかで沖縄人自身の手によって生み出され、1980年代後半から急成長を遂げた福音系の教会である。ここで取り上げたキリスト教とは、理念的宗教ではなく、民衆によってなわれた宗教として著者が捕らえようとしたものであり、著者がこれを「民衆キリスト教」とよぶ所以はそこにある。

本論は五章から構成されている。

まず、なぜ沖縄のキリスト教なのかといった問題提起の確認として、次の事例を挙げている。

明治以降の日本社会におけるキリスト教の教義や思想が、日本の文学、芸術等の方面に果たした役割が非常に大きいものにも関わらず、定着といった面から見れば失敗に終わっている。そんな状

況にあって、沖縄におけるキリスト教の普及は、全国平均の二倍を超すという。こうした状況は「琉球・沖縄文化圏」の独自性や「ヤマト文化圏」との異質性に留意すべき必要性も挙げつつ、韓国をはじめとした、東アジア地域における宗教現象の比較研究の可能性をふくむものであるという。また、現在まで沖縄で行なわれてきたキリスト教研究論文の視点を①キリスト教徒②沖縄の「伝統的」な文化や社会組織に関心を持つ研究者の二つに大別し、唯一真理の教えが、祖先崇拜や呪術的迷信の根深い異郷の地にかに浸透し、定着しうるかを明らかにしようとしているが、そこにはキリスト教という一宗教をたえず、理念的統一体として見るという、フィルターの違いが認められないことを指摘している。著者の一つの試みは、まず、その枠を一度取り壊すことによって、具体的生活者のレベルにおいて、キリスト教会が提示する教義や理念が、いわゆる伝統宗教によって構成された理念体系とどのように衝突し、また依存し、融合しながら独自の呪術・宗教現象を生み出してきたのかを具体事例を通じて検討することであった。そのねらいとして、現存するカミンチュ、ユタ、カンカカリヤなどと呼ばれる、沖縄の伝統的宗教者が担ってきた社会組織や村落祭祀によって維持された世界観と、それが時代の変化のなかで、維持し切れなくなってきた部分を照射する可能性が見出せるのではないかと、いうことを挙げている。

では一体、沖縄の伝統的宗教世界とよばれるものは一体なにか。ユタの宗教者によって支えられてきた伝統的救済世界の構造を著者は次のように分析した。①宿命の原理と情意的原理の共存②個別主義的性格③直覚的性格がそれである。一方、沖縄キリスト福音センター（以下「教会」とする）の救済構造は明快な二分法にあるとしている。

本書において、著者の救済構造分析を理解する上で重要になってくるのが「霊」の存在である。これは災因をどのように解釈し、意味付けをおこなうかということであるが、ユタ的宗教者によって担われてきた救済世界は、災因の大幅な「外在

化]であった。病気や災難に苦しむ当人を徹底的に追い詰めないで、不幸や災難の究極原因をその本人の人格内部の責任問題としてではなく、個人の外側に広がる対象や関係性の中に、転嫁し、拡散することであった。一方、教会の解釈も災因を「悪霊」とし、外在化させているが、唯一絶対の神の権威をその対極に置き、「悪霊」という絶対的な負の属性を強固に設定することで、伝統宗教によって説かれた様々な災因論を切り捨てることを可能にしたとしている。そして、災いのもとである「悪霊」を追い出し、「聖霊」を迎え入れる事によって、確信と安らぎが得られる。この明らかな二分法が、ユタの宗教によって作り出された災因の複雑さに悩まされ、自家中毒に苦しむ人々にとって「救い」の根拠が提示されることを可能にしていると分析している。

また、著者は、この二分法と責任主体の明確化が、「近代化」という歴史的変化と適合性を持つこともあわせて指摘していることを記しておきたい。それは、日常生活のマニュアル化進行の中で、手近に因果関係の確かさを偏重することが、物事を実用的・功利主義的判断で処理してしまう傾向があることに合致するというわけである。

聖霊と悪霊、善と悪、などの二分法強調やユタの宗教を廃してゆく過程の中にもそのことは顕著に現われてくるし、これはプラスとマイナスを基本として曖昧を許さない二分法的思考と適合し、教会活動における映像機器の導入にも見られるように、近代合理主義の中に生じ、合致してゆく一因として挙げられる、ということである。

本書の解釈に従えば、「救い」は、いわば、それを囲む社会的構造の変化に機縁しているともとれる。それは、沖縄が戦後抱えてきた社会状況でもあり、果てしなく拝み続けることへの疑問と同時に、即答を求めてしまおうとする時代の時間の経過の早さが必要とした宗教かもしれない。

また、教会における「罪の自覚化」→「証し」＝「告白」といった悪霊を追い出す作業のなかでは、外在化された災因が再び自己に戻される事が行なわれる。つまり、そうすることで、現実社会

における人間関係の葛藤を解消し、遺念にみられるような、社会関係の不全を遠ざけていると捉えられる。これは、著者が『津軽のカミサマ』の救いの構造で説いた、「共苦共感世界」の形成と類似する、自己内省の示唆である。このことは、ユタの宗教においても行われている事であるが、教会の場合は、災因を絶対的な悪霊とし、「罪」にあたるものを明示し、世俗的価値の否定を行ない、それを制度化することで、拡散しがちな災因解釈を集約させる役割を果たしているのである。

東北における民間宗教者であるカミサマが、たとえば愚さみの信仰にみられる「こばみ」の解釈において、社会的機能に破綻をきたさない状況の提出を考えざるを得ない状況にあることなどを考えあわせると、本書は、沖縄の伝統的世界を地に描き、そのうえに災いが絶対的悪霊となり、その対極に唯一神をもつキリスト教という既成宗教の一既念を用いる事によって、新たな沖縄の「救い」を生じさせていったことが、「霊」の操作の新しい意味付けによって鮮やかに描き出されている。一つ疑問に感じる点は、著者も本文中で述べておられるが、霊の管理や霊の秩序を強調し、聖職者の秩序を一元化させるなどを行なっている教会は、宗教団体としてどのように分類され得るのかといった問題である。恐らくこのことは、今後、沖縄社会のなかで、新たに担った役割を、教会がどのように地域の中にかしつづけられるのか、また、「周縁からのリバイバル」と著者が語るように今後の教会の動きに関わってくるのであろう。

また、本文中にも述べてあるように、韓国における福音主義的・保守主義的教会の爆発的な成長の実態と、その比較をはじめとして、沖縄だけにとどまらず、東アジア地域における民衆宗教の比較研究といった大きな課題と可能性がふくまれていることを記し、今後その方面の研究報告に期待したい。

(1991年9月 どうぶつ社刊)